



News Letter

No.25

一般社団法人日本老年歯科医学会 会報

平成 28 年9月30日発行

【本号のトピックス】

日本老年歯科医学研究会発足30周年を迎えて・設立当時を振り返って
／厚労省老人保健健康増進等事業に本会の事業が採択される／委員会
だより(研修委員会)／学会だより／支部だより(石川支部共催セミナー・栃木・茨城
支部共催セミナー開催報告)／国際学会のご案内／支部セミナーのご案内

日本老年歯科医学研究会発足 30 周年を迎えて

渡邊 郁馬

日本老年歯科医学会名誉会員

1981(昭和 56)年、日本で最初の老年歯科医学に関する書籍『老年歯科』を編集し発刊したところ、各地でかなりの反響があったことから老年歯科医学に関する関心が高まり、各地で研究会やシンポジウムが開催されるようになりました。『老年歯科』の最後のページに、私がそれまでに集めた文献を分類(山根 瞳先生)し、すべて掲載しました。これも一つのきっかけになったと思います。

1950 年の後半、高齢化社会の到来が叫ばれるようになり、歯科の分野でも高齢者に対する治療が問題となってきました。地域で活躍している歯科の先生方から、病気の高齢者の治療や在宅の歯科医療についての質問が多く寄せられてきました。

当時の歯科大学には、高齢者に関する講座あるいは教室はなく、また大学に通院する患者は 60 歳以下の健康な人がほとんどでした。そのため高齢者への対応は難しかったと思います。

ただ一つ、高齢者を専門に歯科医療を行っていたところは、私が勤めておりました東京都養育院附属病院(東京都老人医療センター、現在は東京都健康長寿医療センター)でした。

開業医からの問題点については、歯科口腔外科においても検討されており、それまでのデータをもとに私が全国各地で講演をしてきました。しかし、この問題については、歯科界の各専門分野の先生方といろいろな点について検討する必要があると思っておりました。

アメリカにおいては、1960 年代に老年歯科医学会が発足し、機関誌が発行されていました。こうしたなかで、1985 年 1 月にコロラド大学歯学部長のメスキン教授から、老年歯科医学の国際雑誌を作るから、副編集長を引き受けてほしいとの要請がありました。日本の現状から時期尚早であると思われましたが、将来を見越して引き受けることにしました。



設立総会における園山教授(日歯大)による経過報告

1985 年、ラスベガスで IADR の総会が開催されたときに Gerodontology の編集会議が開かれ、下野正基教授(当時東京歯科大学助教授)と出席しました。メスキン教授、ペターセン教授(スウェーデン)やその他の教授と意見交換をしました。Gerodontology の雑誌は、翌年から年間 6 冊発行されることになりました。

日本に帰国し、石川達也教授(東京歯科大学学長)と相談した結果、日本老年歯科医学研究会設立準備委員会を 1986 年の 6 月に発足することになりました。メンバーは石川達也、園山 昇、枝 重夫、高江洲義矩、野間弘康、栗山純雄、下野正基の先生方と私の計 8 名でした。数回の会合によって設立趣意書、各分野の世話人の推薦など内容が具体的になり、1986 年 5 月 25 日の世話人会で私(東京都老人医療センター歯科口腔外科部長)が代表に推薦されました。

日本老年歯科医学研究会の設立総会は 1986 年 9 月 13 日、日本大学会館で幕を開けました。世話人代表の挨拶として私が研究会の趣意書を中心に、老年歯科のこれまでの歩みとこれからの発展の必要性について述べました。



設立総会における榊原教授（愛院大）の議長挨拶

議長には榊原悠紀田郎教授が選ばれ、会則と役員構成および評議員選出に関する協議が行われました。その結果、本会発足にあたっては各領域から推薦された世話人 71 名が本会の評議員に、また、初代会長には私渡邊郁馬が推薦されました。

研究会は 2 回、3 回と会を重ねるごとに会員数も増加し、第 4 回の時点で 730 名となり参加者も 400 名を超えるようになり、そろそろ研究会を発展的に解消したらどうかとの声が多くなったため、1990 年 9 月の学会より日本老年歯科医学会と改め、理事長には研究会から引き続き私が就任することになりました。

第 1 回日本老年歯科医学会大会長は大阪医科大学の稗田豊治教授が就任し大阪で行われました。会員数は、903 名でした。



シンポジウムにおける座長石川教授（東歯大）と各シンポジスト

さらに、当学会は学際的要素が多く含まれるため他の領域との連携も重要であることから、1991 年に日本老年学会の一分科会として加入を申請したところ承認されました。なお、日本老年学会が国際老年学会に加入していたため、1993 年から国際老年学会に正式に承認されました。1999 年 4 月には日本歯科医学会の専門分科会として加入が認められました。

以上のような経緯でこの学会は先輩たちのボランティア活動によって築き上げられてきて、現在の規模に拡大し各学会からその存在が認識されてきており、過去 30 年日本の高齢者の歯科医療に大いに貢献してきています。今後ますます学会が充実し、日本の歯科医療に貢献することを望んでいます。

設立当時を振り返って

研究会との出会い

山根源之（東京歯科大学名誉教授）

東京歯科大学 4 年生夏の都老人医療センター病理解剖が出会いです。口腔外科入局 2 年目の 1971 年から 25 年間、渡邊先生のもとで非常勤医を勤めました。大学とは違った高齢者の抜歯等の大変さを痛感し、全身状態を考えた老年歯科医学を目指しました。

新しい風

山根 瞳（アポロ歯科衛生士専門学校）

研究会発足当初、郁馬先生をバックアップしたのは 40 歳前後の若い仲間たちでした。あれから 30 年、若い会員の先生方、老年歯科は皆さまの問題です。50 代に若手などと言わせないで、学会に新しい風を送り込んでください。

30 周年の道のりに寄せて

米山武義（米山歯科クリニック）

日本老年歯科医学研究会、発足より 30 周年、おめでとうございます。多くの先生方に支えられながら特別養護老

人ホームでの診療経験をきっかけに、私は老年歯科医学の道に入らせていただきました。これからも開業医の視点を大切にして、学会を盛り立てていきたいと思えます。

気運づくりと学会活動

那須郁夫（日本大学松戸歯学部）

研究会発足の 3 年前から施行されていた老人保健法には、歯科健診の項目が見当たらなかった。そこで厚生省は、渡邊郁馬先生をはじめ、衆智を集めて 8020 を発明した。骨粗鬆症とともに歯周病検診が明記され、現在がある。

32 年前

深山治久（東京医科歯科大学）

32 年前、高齢者の全身麻酔の症例を集めて老年歯科医学会で発表するように命じられました。「高齢？ 老年？」と首を傾げながら準備をして、昭和大学の講堂で発表、続けて論文としました。別刷数を連絡したのは東京都老人医療センター（当時）で、今思うと渡邊郁馬先生が電話に出られたのではないのでしょうか。